

JLSR ニュースレター

手乗り AI が肩乗りになったら

土田 拓

アシモフの名前を聞いたのは、これで何回目だろうか。頭の片隅でふとそう思いながら、職場の上司と他愛もない雑談を交わす。テーマは、AI の進化と社会・人類の変容。私たちの間では、少なくとも出張先の居酒屋で話題に上るくらいには定番の話だ。三大 SF 作家の一人で、ロボット工学三原則を示したアイザック・アシモフは、その主要キャストの一人である。

チャッピー(某社 AI)へ。

「アイザック・アシモフとロボット工学3原則について、簡単にまとめて。」

「アイザック・アシモフは、サイエンスフィクション作家であり、彼の作品にはロボット工学に関連する「ロボット工学 3原則」が登場します。これらの原則は、ロボット工学における倫理的な指針を示すものです。

第一法則: 人類への危害を加えないこと

ロボットは人間に対して危害を加えてはなりません。人間の生命や安全を守ることが最優先です。

第二法則: 命令に従うこと

ロボットは人間から与えられた命令に従わなければなりません。ただし、この命令が第一法則に反する場合、第一法則が優先されます。

第三法則: 自己保存の原則

ロボットは、自己を守るために人間に対して反乱的な行動を起こしてはなりません。ただし、第一法則および第二法則が適用された場合、自己保存よりもそれらの法則が優先されます。

これらの原則は、アシモフの多くのロボットに関する短編小説や長編小説に影響を与え、人工知能と倫理的な問題について考える上で重要な役割を果たしました。これらの原則は、現実のロボティクスや人工知能倫理の議論でも参考にされることがあります。」 (ChatGPT 2023, September 25 Version / Access 2023, October 4)

第三法則の説明に少し違和感が……。本来は第一、第二法則に反しない限り自己を守るという趣旨だったはずだ。矛盾しているわけではないが、裏返したような表現になってしまっている。それから、正直に書くと私は気付かなかったのだが、第一法則の説明で「人類」と「人間」が使い分けられていない。後年、人類全体の安全を守るために、第一法則に優先する原則として追加された第零法則が混ざっているのではないか。というのは上司の談。

現状、回答の精査は欠かせない。それでも、Web でテキストを入力するだけで、なかなか的確にまとめてくれる。生成系 AI の新規性は、とっつきやすいインターフェースを提供した点にあるという、これまた上司の見解も頷ける。今後、AI が進化していったら、一家に一台ではなくて、一人一体(?)チャッピーの時代がやってきそう。会話をする時には、まずチャッピーに意見を聞いてから話をする。相手もまたしかり。チャッピーなしに人間の生活は成り立たなくなる。そうなるとチャッピー同士でやり取りをした方が伝達スピードは速いし、やはり、最終的には脳に AI のチップを埋め込むことになるのでは?かくして、今はモバイル端末としては、スマホのなか、掌に収まっているチャッピーは、上へ上へと登っていくことなる。上司曰く、その第一段階が肩乗りというわけだ。

ここまでくると、人間とチャッピーの境界線がどこにあるのか明確でなくなってくる。常にチャッピーを介して意思決定するのであれば、もはやチャッピーは自己の一部であり、そのチャッピーは他者とも共有されているのだから、自己と他者の境界も不明瞭だ。ひとつの巨大な集合意識のなかでのやりとりにすぎなくなるとも捉えられるかもしれない。そういえば、アシモフの短編「最後の質問」でも、宇宙の遙かな歩みの過程で人類は集合意識になっていたっけ。

自己が曖昧になり、生命の定義自体が塗り替えられた未来において、人間が人間の語りを聞いてまとめるという行為はどのような意味を持っているのだろうか。「人間のことは人間にしか研究できないと思うけどな」先日、久しぶりに会った知人はそう言っていた。フィールドに足を運ぶことを良しとする自分の中の感情も同様に主張している。けれども本当にそうだろうか。論文を始め AI が生み出した成果のオーサーシップに関する議論はすでに始まっている。「人間にしか」という前提条件が揺らぐ一方で、近年、ライフストーリー研究が分野横断的に活発化しているのは、急速な社会と技術の変化にさらされた人間性を理解しようという試みなのかもしれない。

「中二病」というには歳をとりすぎた会話を職場で繰り広げている父の前で、AI 界の未来のスター「ドラえもん」の格好をした幼子達が一斉に踊り出す。今日は幼稚園の運動会。娘の出番はもう少し後だ。

(つちだ・たく 徳島大学)

会員エッセイ

戦中派の母のライフストーリー

矢野泉

昭和2年日中戦争勃発の10月7日東京府大森に生まれた。曾祖母が新橋で料亭をやっている、横山大観などがよく客としてきていたが、騙されて店を取られた。料亭時代は奉公人が大勢おり、「しんちゃん」が中華(シナ)料理をふるまってくれた。江戸生まれの曾祖母や明治生まれの祖母は、「学校なんかに行くより、芸事をしなよ」と伯父を日本舞踊西川流家元邸に預け、母は大森で育った。東京大空襲の夜、自宅で寝ていた祖母と母は、サイレンで飛び起きて、防空壕に飛び込んだ。焼夷弾は花火のようなひゅううひゅううと音を立てて雨のように降り注いだ。防空壕に直撃すればみな焼け死んでしまう。朝が来て外の音がやんだ。防

空壕を出てみると、あたりは焼け野原で、黒焦げの死体がそこかしこに転がっていた。母は死体を見慣れてしまっていたので、なにも感じなかった。空襲前は女学校から海軍将校のもとに動員されていた。馬に乗る将校の長靴をピカピカに磨くのは母の仕事の1つだった。母はその男性に初恋をした。色白で背の高い優しい青年だったという。

岩手県陸前高田市・北限のゆずの由来を求めて

筒井久美子

岩手県陸前高田市と聞くと「東日本大震災」や「奇跡の一本松」を思い浮かべる方が多いかもしれませんが。しかし、今回は陸前高田のゆずについてお話したいと思います。

陸前高田には樹齢200年を超えるといわれるゆずの木が生息しています。柑橘類は南方の植物というイメージが強いのですが、柑橘類の中でも耐寒性が高いゆずは、「岩手の湘南」と呼ばれるくらい温暖な陸前高田でも生息可能で、陸前高田のゆずは「北限のゆ

ず」と呼ばれています。この北限のゆずはどのような経緯で陸前高田にやってきたのか、今年の5月から陸前高田にかかわる大学生や元大学教員らと共に「北限のゆず調査団」を立ち上げ調べています。

きっかけは、陸前高田市で『北限のゆず』でみんなの笑顔と希望を!をモットーにゆずのブランド化に取り組んでいる「北限のゆず研究会」から、団体発足10年を機にゆずについて語れる新たなストーリーとして、北限のゆずの歴史を調べてほしいというニーズをいただいたことでした。もともと陸前高田のゆずは庭木などとして植えられ、自宅ですったり親戚や近所に配ったりされていたと言われていました。このゆずが注目されたのが2010年でした。県内の産物を使ったリキュールの商品化を進めていた株式会社南部美人が、陸前高田でゆずが獲れることを耳にして、商品化を打診、震災で計画が一時中断するも2011年夏には再開し商品が完成しました。その後、南部美人からブランド化を勧められ、2013年、市内の産直や社会福祉法人が発足させたのが、北限のゆず研究会です。研究会の会長は『『すごいんだよ』と言ってくれる人の言葉を地元の人間として受け止めたかった』と話しています(『東海新報』2017年1月1日14-5面、『盛岡タウン情報誌 月間アキュート』2012年10月号)。

北限のゆずの由来について調べ始めたところ、地元新聞や地域情報誌、また、柑橘類の調査に注力した地理学者(意外にも地理学!)の方による大著から、地元住民の方の証言を6つ発見しました。その1つが、気仙大工が持ち帰ったというものです。気仙大工とは陸前高田が発祥といわれる大工の技術集団で、かつては出稼ぎをしながら生活をしていました。『盛岡タウン情報誌 月刊アキュート』(2012年10月号)の取材に対して、陸前高田をエリアに含む大船渡農業改良普及センターの佐藤敬さんが「ゆずに関しては、船に乗って西国から伝来したとも、りんご同様、気仙大工が持ち帰ったとも言われていますが、実際のところさだかではありません」と答えています。

今年8月には、学生らと共に陸前高田を訪れてゆずの古木をお持ちの方などに聞き取りを行いました。その際、気仙大工の技術を伝承する目的で市内に開設されている気仙大工左官伝承館の方からもお話を伺いました。県内にあるその方のご実家にも気仙大工がいらっしや、出稼ぎ先の九州からシュロやカラタチ

を帰ってきて庭木として植えたことがあるということでした。『気仙大工雑纂』(平山憲治1992)や『「気仙大工」概説』(平山2013)にも、気仙大工が梨を持ち帰ったという記載があり、実際に出稼ぎ先から果樹を持ち帰るということがあったようです。

また、正徳寺という浄土真宗のお寺の方に次のようなお話を伺いました。現在境内にあるゆずの木は、僧房を建て替える際に僧房脇にあったゆずの木を切ったか譲ったかしたため、建て替えを行った気仙大工が自宅にあったゆずの苗木を移植したもので、植えたのは1993~4年頃だと思う。もともと生えていたゆずは、先々代(17代)住職の了然が植えたもので、建て替え当時はまだ10年か20年経たないくらいのも木だった。先々代がそのゆずをどこからもってきたのかは分からない。後日筆者が調べたところ、了然さんは、1900年に生まれ1973年に亡くなった方でした。とすると、ゆずを植えたのは1970年前後と考えられます。

さらに、気仙大工に詳しい地元の方から、江戸時代に活躍した気仙大工の名工・五郎吉さんは正徳寺とゆかりがあるし、京都へも訪れていると教えていただき、文献を数冊貸していただきました。それらの文献によると、そもそも江戸時代、気仙大工の出稼ぎ先は基本的には仙台藩内に限られていたとされています。しかし、よく読んでいくと修業のために、大阪、京都、奈良、江戸、日光、羽黒山(山形)などへ行っていたことが分かります。ゆずが生息していた西国へも気仙大工は訪れていたということです。五郎吉さんも京都、奈良で修業をしたと言われています。彼は陸前高田市小友町出身、1753年に生まれ1842年に89歳で亡くなった長命な方です。彼は正徳寺の檀家で、本堂の建設にも関わっています。さらに、五郎吉さんと正徳寺生まれでのちに西方寺の住職になる秀諦さんは竹馬の友でした。秀諦さんが若い頃、京都の東本願寺の役僧を勤めていたとき、五郎吉さんは大工修業の旅の途中で秀諦さんの元を訪ね、数年身を寄せたといひます。そして、京都や奈良の寺社を巡り見聞を深めたそうです。

もしや、五郎吉さんが西国修業の帰りにゆずを持ち帰ったのでは、それを檀那寺である正徳寺に植えたのでは、了然さんは例えば五郎吉さんのゆずの木が枯れてしまったから新しくゆずを植えたのでは…そのような妄想が膨らみます。しかし、これらはまだ妄想に

すぎず、調査はまだまだ道半ばです。2月に北限のゆず研究会が主催するイベントで成果を報告することになっているので、調査を続けていきたいと思います(何かご存知の方はご連絡ください！)。

陸前高田は東日本大震災で甚大な被害を受けた地域で、筆者も震災がきっかけで陸前高田に通うようになりました。正徳寺も当時避難所になった場所でお話くださった方は、これまでは避難所経験について話をするが多かったとおっしゃっていました。しかし、今回は「震災」とは異なる「ゆず」という意外な切り口で陸前高田の方々との出会い直すことが出来るようで、ちょっとワクワクしています。

(参考文献)

気仙大工等の伝承を探る会編、1992、『小友匠衆の歩み』小友コミュニティ推進協議会・小友公民館高齢者教室自主講座・気仙大工等の伝承を探る会。
花輪喜久蔵事績録刊行委員会、1993、『気仙・匠・年輪——巨匠 花輪喜久蔵の足跡と技能伝承をめざして』花輪喜久蔵事績録刊行委員会。
平山憲治、1992、『気仙大工雑纂』耕風社。
平山憲治、2013、『「気仙大工」概説』(仮称)気仙職人学校開設準備室。

第17回ライフストーリー調査研究講習会の報告

2023年7月23日(日)に第17回ライフストーリー調査研究講習会を開催しました。これまで講習会に参加したことがない方々向けの入門編で、参加者は21名でした。今回は、初めて「動画」を導入しましたが、音質等にまだまだ課題がありそうです。今後、改善を図っていきます。

以下に、参加者の感想(抜粋)を掲載します。

○「対話的」という点について、インタビューはそもそも聞き手と語り手がいるのだからどのようなインタビューでも大抵は対話的ではないかと考えていた(相づちしたり、回答に応じて質問したりする)。講習会に参加して、「対話的アプローチ」でいう「対話的」とは、聞き手が話し手の発話に関与するかどうかだけでなく、その場にどのような立場で関与しているのかということも

含めて考えていると理解しました。マスターナラティブやモデルストーリーをどのように決めているのかも聞きしてみたいです。

○直接講義を聞くと、色々知識がまとまってきて、非常に良い体験だなと感じました。調査者のポジショナリティについては非常に関心のあるところで、もう少しお話を聞きたいと感じました。

○正直に申し上げますと、私自身がライフストーリー研究を実施した経験はまだありません。そのため、今回得た知識と理解を基に、ひとつひとつのステップを丁寧に踏みながら、実際のライフストーリー研究に取り組んでいくことを楽しみにしています。新たな学びと経験が待ち受けていると思うと、ワクワクします。

○そもそもライフヒストリーとライフストーリーの違いが十分に理解できていない状態で参加させていただきました。まずその違いが消化できたことは幸いです。

○講義の途中で、適宜先生に疑問点を質問させていただく機会があったのが、講義を理解する上で大変勉強になりました。

○最初の録音での説明は、文の最初は声の大きいのですが、語尾に行くほどわかりづらかったのでできれば、何かの講演の時の録音をそのまま流されるより、それ用に録音したものを使用されたほうが良いと思います。

LS研 特別研究会 《開催報告》 みんなでじっくり語り合おう VOL.1 ライフストーリーを聴く私の ポジショナリティ

多分野にわたる会員の交流を目的に、今年度から新しく始まった特別研究会が2023年7月30日(日)に開催されました。初回のテーマは「ポジショナリティ」。ワーキンググループの3名からの話題提供の後、グループに分かれてディスカッションが行われました。

以下に、参加者の感想(抜粋)を掲載します。

《特別研究会について》

○分野の異なる方々が集まって、LS研究における重要なテーマについて話すという試みはとても興味深く、

かつ自身の勉強になりました。

○自身で、これまであまり検討してこなかったことや、理解していなかった点を確認できてよかったと思います。異なるフィールドの方と意見交換をできて理解を広げることができて有意義でした。

○研究会はフレンドリーで歓迎されると感じた。コミュニティのように感じられ、人々は新しいアイデアや異なる視点も歓迎していると感じた。

○会員有志の方々が企画した研究会、とても新鮮でした。秋にもまた開催されるかみしれず、年度末にはシンポジウムが開かれる予定とのこと、期待しています。

《「ポジショナリティ」について》

○とても面白かったです。これまでの調査では、ポジショナリティを考えたことはありません。自分のポジショナリティはインタビューを行ったときにあらわれているかもしれませんが、気づいていませんでした。

○今回の「ポジショナリティ」は、良いテーマだったと思います。良いテーマと考える理由は、初心者から熟達者に至るまで、ライフストーリーインタビューを行うプロセスにおいて、立ち止まって考えなければならない重要な視点と考えるからです。

○調査者の立ち位置(ポジション)は、見方を変えると権威的な行為ともとられることが理解出来ました。しかし、「生きている(きた)世界を理解してほしい(したい)」と対象者、調査者双方が望んだ場合は、この枠組みは無くなり、対象者に教えてもらう様な立場に変わるのではないかと思いました。

○今までは「ポジショナリティ」にもかかわらず、自分の視点のみで考えていたことに研究会を通して気づきました。

○私は「ポジショナリティ」とは？をあまり考えずに、ただおもしろそうだと思い参加しました。それで、最初の三人の方の発表をお聞きして、「ポジショナリティ」もいろいろな捉え方ができるんだなあと思いました。まず、そこから考えるという意図だったのかもしれないと思いました。しかし、趣旨説明で社会学等では「ポジショナリティ」の研究は多くされてきているというお話がありましたので、私たちがこれから話そうとしている「ポジショナリティ」はこういうものであるという共通認識があった方が話しやすかったかみしれなと思いました。

日本ライフストーリー研究会 第9回夏期研究集会報告

2023年8月27日(日)にリアル参加とZoom参加を併用する形で第9回夏期研究集会が開催されました。今年度も、報告終了後にはバーチャル懇親会を開催しました。ここでは、発表者の感想を紹介します。

第1報告:周 馨驥(神戸大学)「ポスト・フェミニズムにおける女性の「自己決定権」の再検討—「選択的シングルマザー」の語りより」

日本の西から東に行って、異なる風景を見ました。夏に雪がない富士山の姿をはじめ見て、とても感動しました。緑に囲まれた環境の中で、虫鳴りを聞きながら発表するのは最高でした。このたびは夏期研究集会で発表する機会をいただいて、様々な視点からの意見を聞くことができて、本当にありがたいです。特に、自分の研究の中でどのようにライフストーリーという方法を用いるのかについては、明確にわかったように感じました。これから、もう一度インタビューを書き起こして、データをスクリプト化する作業を行います。その上で、論文投稿をめざして、皆様からのアドバイスを踏まえて、論文の内容をよりよく洗練させていきたいと考えています。

第2報告:山田恵子(新潟県立看護大学)「予期せぬ傷害で子どもを亡くした親のライフストーリー—親のグリーフに影響を与えた看護師の関わり—」

夏期研究集会に参加された皆さま、ご助言いただき大変ありがとうございました。社会学や教育学、看護学など様々な分野の方々と討議することができ、大変有意義でした。それぞれの考え方を否定しない、暖かな雰囲気があることで、研究者として自身の考えを熟成させていきやすいと感じました。何か良いことを言わないといけないというプレッシャーが強くなると、本当に大事なことがどこかに隠れてしまうものですが、自分自身がインタビューした内容をどのように感じているか言葉にして語ることで、改めて、言葉の持つ意味を考えたり、もっと良い表現に辿り着くなど、そのように試行錯誤して分析が深められていくことに気づくことができました。これからも、研究集会で多くの皆さんのライフ

ストーリー研究に触れる機会が育まれていくことを楽しみに私自身も努力していきたいと思っています。

第3 報告:長澤敦士(京都大学)「生活困窮を背景にした「援助交際」についての語り—生活保護利用世帯で育ったある若年女性の生活史調査から—」

わたしは夏季研究集会で経済的困窮を背景にした援助交際をした経験のある女性のライフストーリーを紹介しました。参加者からインタビューという場における相互行為という視点から様々な意見をもらいました。研究集会で紹介した場面はわたしが数年前から考えあぐねているところだったのでいろんな経験をされた参加者からたくさんの意見をもらえたのはとても有意義でした。懇親会でも参加者からいろんな質問や意



見をもらってそれとても楽しかったです。いずれにせよ、改めて語りのもつ「ちから」を強く感じる機会となりました。ありがとうございました。

LS 研 11 月例会のお知らせ

日時:2023 年 11 月 12 日(日)13:30~16:30

場所:日本ライフストーリー研究所

リアル参加(5 名ぐらい)およびオンライン参加

報告者:吉田静さん(立教大学大学院)

報告タイトル:生きることへの意志としての出漁——「好き」を引き受ける突棒漁師のライフストーリー

概要:突棒漁(つきんぼうりょう)とは、船の先が細くのびた突棒船でカジキ等の漁獲対象を追い、銛を投げて漁獲する漁法であるが、現在、効率よく収益をあげられるような漁ではないと語られる。2017 年から報告者である私は、突棒漁を「好き」だと語って漁に出つづ

けてきた漁師にライフストーリー・インタビューを行なってきた。

本報告では、この突棒漁師Aさんにとって漁へ出ることがもつ意味を考察しようと試みる。若い頃から漁の責任者である漁撈長を務めてきたAさんは、なんとかでも獲るという度胸をもって漁師として身を立てつづけてきた。だが、年齢を重ねてきたいま、病気で目を悪くしたり、腰を痛めるなど、漁をあげることが難しくなっている現実がある。「それでも、なんか、(・・)海さ行ってるほうがいい」と語るAさんにとって、漁に出ることとはどのような意味をもつのか、そして私は「好き」な漁に出つづけるAさんを生き方から、なにを受けとったのかを考えていきたい。

申込:以下の URL よりお申し込みください。

http://lifestory.or.jp/meeting_form/

★報告者は随時、募集中です。メールにてお問い合わせください。『語りの地平』に投稿希望の方は、ぜひとも、報告をお願いいたします。

受け入れ論文、図書、報告書

2023 年 4 月 11 日~10 月 14 日(下線は会員)

論文、報告書、著書などをお送りください

- ・吉村さやか,2023『髪をもたない女性たちの生活世界——その「生きづらさ」と「対処戦略」』生活書院.
- ・打保由佳,2023「ソーシャルワーカー養成と支援現場と」旭洋一郎・高木博史編,『いま、ソーシャルワークに問う』生活書院.
- ・好井裕明他編,2023『新社会学研究 第8号』新曜社.
- ・宇都宮みのり,2023『遠き山に光あり』文芸社.
- ・土屋葉編,2023『障害があり女性であること——生活史からみる生きづらさ』現代書館.
- ・青山美智子,2023『リカバリー・カバヒコ』光文社.
- ・奥村隆,2023『社会学の歴史Ⅱ』有斐閣.
- ・成元哲・牛島佳代編,2023『原発分断と修復的アプローチ』東信堂.
- ・小林盾編,2020『嗜好品の社会学——統計とインタビューからのアプローチ』東京大学出版会.

第18回 ライフストーリー調査研究講習会
「ライフストーリー・インタビューをやってみる」
参加者募集！！

日時:2023年11月26日(日)10:30~16:40

場所:ハイブリッド(日本ライフストーリー研究所/オンライン)

講師:矢吹康夫氏(中京大学教養教育研究院 講師)

専門は社会学、障害学。主著に『私がアルビノについて調べ考えて書いた本——当事者から始める社会学』(2017年、生活書院)など。

プログラム:

1. 調査を始める前の準備(10:30~12:10)

ライフストーリー・インタビューは何ができるのか、誰を対象にするのかなど、社会調査における位置づけを確認します。続いて、調査を始める前の準備として、テーマ設定、調査対象の見つけ方、依頼のやり方などについて概説します。

2. インタビューをやってみる(13:00~14:40)

コミュニケーション課程としてのインタビューというライフストーリー・インタビューの特徴をふまえたうえで、実際にインタビューをするにあたっての質問項目の準備やインフォームド・コンセント、終了後の対応、文字起こしのやり方などについて概説します。

3. ライフストーリーをまとめる(15:00~16:40)

物語論や動機の語彙論、羅生門的テクニック、ヴァージョンのある語りといったアイデアなどにも言及しつつ、聞き取ったライフストーリーをどのように作品化していくのかを概説します。また、データを記述するときの悪い例や対応に困る語りも例示しながら、論文をブラッシュアップしていく過程を提示します。

定員:オンライン参加 20名程度 ・ 研究所リアル参加 5名程度

参加申込:日本ライフストーリー研究所ホームページからお申込みください。(締切 11月15日)

<https://lifestory.or.jp/>

受講料: 会員 3,500円 非会員 5,000円

参加者には申込確認と受講料支払いのメールを致しますので、その後、参加費の振り込みをお願いします。

お問い合わせ: jlsr_info@lifestory.or.jp へお願いします。

- ・加藤清明,2023「〈社会の情報化〉をめぐる段階的な研究史」『中京大学現代社会学部紀要』16-2.
- ・江口怜,2022『戦後日本の夜間中学』東京大学出版会.
- ・佐川宏迪,2022『定時制高校の教育社会学』勁草書房.
- ・山崎晶子,2022『現代フランスのエリート形成』青弓社.

新入会員(2023年7月以降、順不同)

木下愛加里(佐久大学)
西本彩香(愛知県立大学研究員)
葛谷玲子(岐阜県立看護大学)

ご寄附をいただいた方(順不同)

高田賀子、大川裕司、米田衆介、船橋純一郎、
土田拓
運営にご協力頂き、ありがとうございました。

事務局から

すずろごと

○7月30日に『みんなでじっくり語り合おう VOL.1 ライフストーリーを聴く私のポジションナリティ』が開催された。WGでの事前の話し合いで、「参加者には大学の先生や若い院生、社会人などのさまざまな立ち位置の方が参加するので、参加者の呼称は〇〇さんで統一しては？」と提案した。WG内で「慣れないから、ええーできないかも！」という声があがったが、当日はお互いを「〇〇さん」と呼び合い、活発な意見交換がされた。専門分野を越えた交流の機会でありたいと、すでに次の企画の話し合いを行っている。(大谷)



○来年の森岡資料室の開室を目指して、建屋を建築中。やっと外壁を作り屋根板をつけたところで、これからがたいへん。屋根材を一枚一枚張る、内部の土台を根太に断熱材を入れながら作っていく手間のかかる作業が待っている。

老体に鞭打つとは、このことか?! (SA)

○やっとこせ暑い夏が過ぎ、柿や栗など美味しいものが盛りだくさんの秋がやってきました! くいしん坊の私は早速栗を購入し、栗の渋皮煮と栗ご飯を作りました。渋皮煮は栗を熱湯に浸し、外側の鬼皮をむき、中の渋皮はそのままにしますが、少しでも渋皮に傷が入ってしまうと内側に水分が入り失敗となるため、細心の注意を払いながら鬼皮を剥きました。おかげで栗の渋皮煮を作るのに、指に豆も作っちゃいました。失敗作はそのまま栗ご飯へ。秋の栗仕事を引き続き楽しみたいと思います。(伊藤)

○私がアカデミック・アドバイザーとして見てきたモンゴル人の学生がこの秋に卒業した。非常に優秀で、3年半で卒業。完全帰国の前に一緒にモンゴル料理を、と誘われ、食べに行った。そのレストランに入るとそこはゲルだった。料理に使われている肉はすべて羊。サラダにも羊肉が入っていた。初めて、塩味の温かい牛乳もいただいた。『VIVANT』というモンゴルロケを行った、今季の大ヒットドラマがあるが、もう一度見直そうと思った。(MO)

『語りの地平』第8号 12月初旬に発送予定です。

住所変更手続きのお願い

お引越等住所が変わられた際には、ライフストーリー研究所事務局まで、住所変更のご連絡をお願いいたします。

年会費の納入についてのお願い

研究所は皆さまの会費で運営をしております。年会費を未納の方は、お振込みをよろしくお願いたします。2年間未納の場合は、研究誌は発送されません。また、自動的に退会となりますので、ご注意ください。

入退会のご案内

入退会のお申込みは、以下までご連絡ください。
E-mail: jlsr_info@lifestory.or.jp

(社) 日本ライフストーリー研究所

〒408-0032 山梨県北杜市長坂町大井ヶ森 1176-489
E-mail jlsr_info@lifestory.or.jp HP: <http://lifestory.or.jp>